

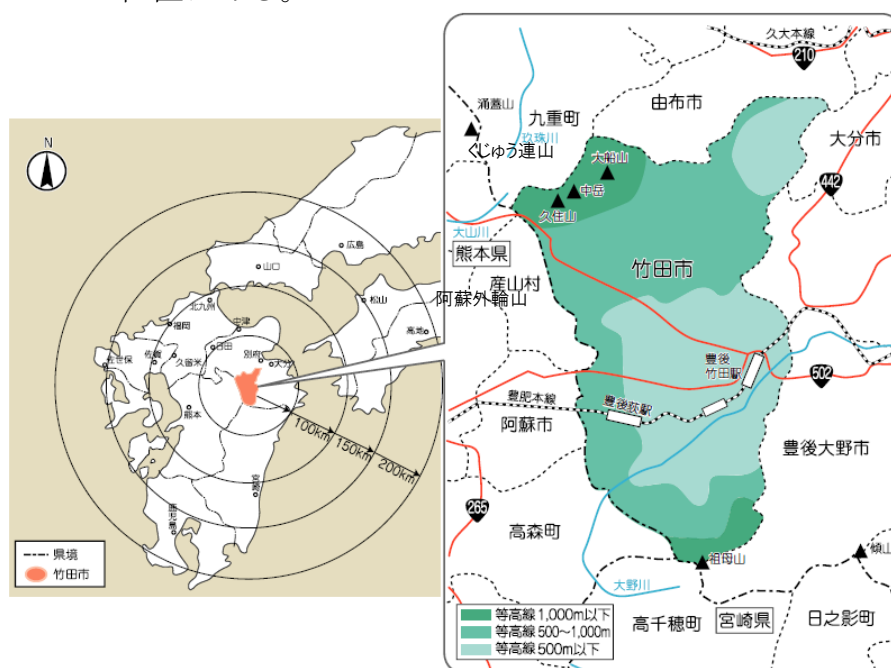
第1章 竹田市の歴史的風致形成の背景

1. 竹田市の概要

(1) 自然環境

〈位置〉

竹田市は九州のほぼ中央、大分県では南西部に位置し、北にくじゅう連山、西に阿蘇外輪山、南に祖母山を控え、1,000mを越える山々に囲まれている。また、市の東側は豊後大野市及び大分市、西側は熊本県、南側は宮崎県、北側は九重町及び由布市に接しており、中心市街地から県都大分市まで約50km、西方の熊本市まで約70kmの位置にある。



竹田市の位置

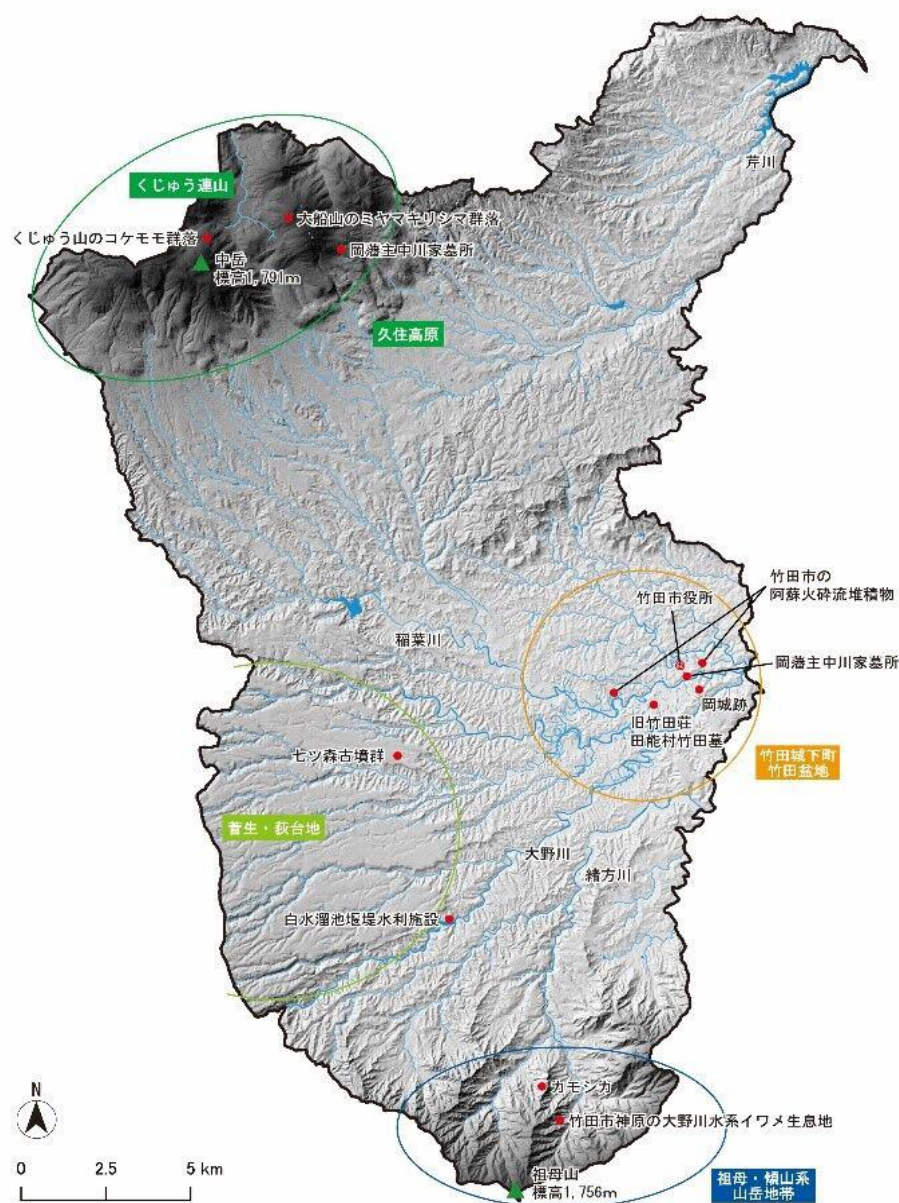
〈地勢〉

本市の市域の総面積は約477.53 km²で、東西約24 km、南北約36 kmに及ぶ。その70.9%を山林と原野が占め、緑豊かな自然環境に恵まれている。標高250mの盆地から標高900m程度の高原地域を経て、標高1,700m級の山々が連なる山岳地帯まで、本市の地形は非常に起伏に富んでいる。西部には阿蘇火砕流によって形成された阿蘇外輪山から続く広大な台地があり、北部のくじゅう連山南麓地域には久住高原が広がり、南部に広がる祖母山麓地域は奥山を形成している。そして、周囲の山々から派生してくる台地を数多くの河川が深く浸食することで、起伏に富んだ地形が生まれている。そのため、標高400～600m以上の丘陵地も多く、低地の河川沿いにおける平地の広がりはずかである。

市域を流れる河川には2つの水系（大野川水系と大分川水系）がある。大野川

水系は、祖母山系を源とする大野川や緒方川、くじゅう連山を源とする稲葉川をはじめ、その支流が市域の大部分を西から東に走り、大分県を代表する一級河川である大野川の源流地帯を形成している。一方、くじゅう連山を源とする大分川水系の芹川も、多数の支流を集めながら市域の北東部を流れている。

これらの河川が与える水資源は豊富であり、竹田湧水群・老野湧水・小津留湧水など、良質の湧水が市内各所に見られ「名水の里」として知られている。北部の久住・直入地区には数多くの温泉が湧き出ており、特に「日本一の炭酸泉」といわれる長湯温泉は、古くから湯治場として利用され、今日も多く観光客・保養客が訪れている。

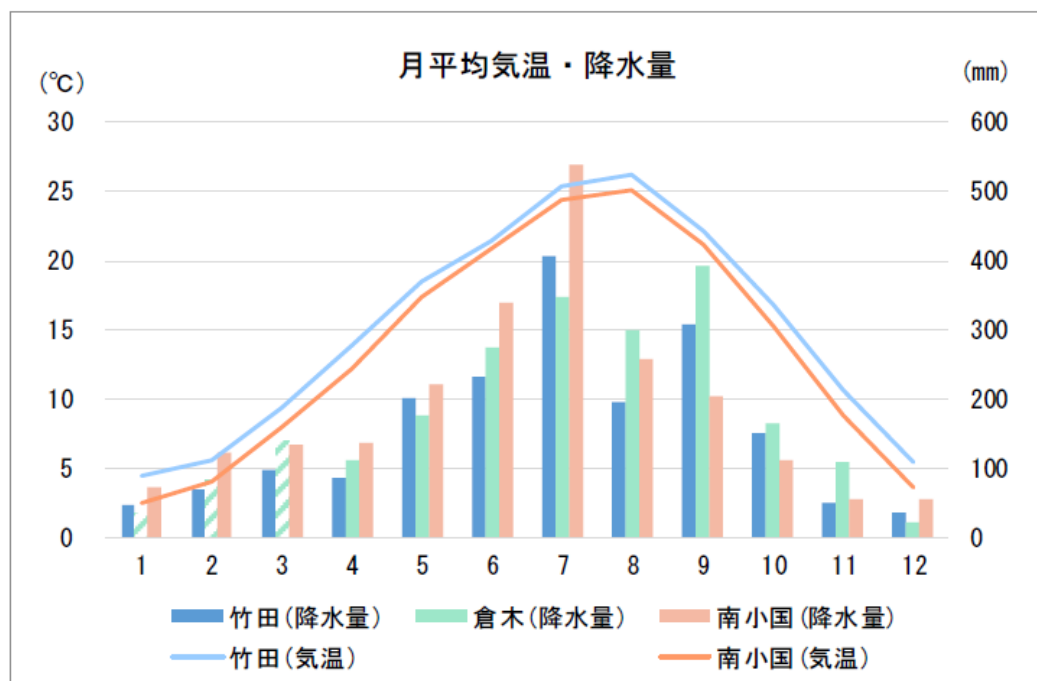


竹田市の地勢

〈気候〉

本市の気候は気候区分によると内陸山地型に属するが、気温や降水量は地形によって差がある。盆地地域（竹田）の平成29年（2017）から令和3年（2021）までの平均年間降水量は1,877 mmに対し、高原地域（南小国^{みなみおぐに}）では2,250 mm、南部の山間地域（倉木^{くらぎ}）では部分的な観測ではあるものの平成17年（2005）から平成21年（2009）までの平均年間降水量は1,606 mm程度に達する。8月から11月までは倉木が最も降水量が多く、12月から7月までは3月を除き、南小国が最も降水量が多い。周辺の高原、山間地域での降水量が多いため、台風や集中豪雨によって高原、山間地域で多量に降った雨水が、下流の盆地へ集中して押し寄せてくるため、たびたび水害となっている。

気温も標高による影響を受け、盆地地域の平成29年（2017）から令和3年（2021）までの8月の平均気温は26.2℃であるが、高原地域では25.1℃、年間平均気温は15.0℃と冷涼である。一方、盆地地域の1月の平均気温は4.4℃であるが、高原地域では2.5℃で、夏季と冬季の気温差が大きい。また、高原・山岳地域では、夏季は比較的冷涼であるが、冬季の冷え込みは厳しく、積雪も多くなる。この他、月平均や年平均の気温は高度の増加により低下するが、夜間の気温が、盆地で低く丘陵や尾根で高くなる気温逆転を示すことが多い。観測点は、北部山岳地域は熊本県の南小国、南部の山間地域は倉木、盆地地域は竹田の観測点としている。ただし、倉木地域気象観測所は平成21年（2009）11月20日までの降水量のみの観測で、1月から3月は統計の残る最新の数値である昭和54年（1979）から昭和60年（1985）の平均から算出している。



平成29年（2017）から令和3年（2021）の月平均気温・降水量（気象庁HP をもとに作成）

(2) 社会的環境

〈竹田市の沿革〉

明治4年(1871)7月の廃藩置県により岡藩は岡県となったが、11月に他の県と統合されて大分県となった。また、大区・小区制で旧岡県は第6大区に編成された(片ヶ瀬村のみ第5大区)。

明治11年(1878)に大区・小区制が廃止されると、「直入郡」が設置された。さらに、明治21年(1888)に行政区画の再編成が進み、直入郡内は66町村から20町村となった。そして、平成の大合併に至るまでの沿革について、現竹田市へ合併した1市3町(旧竹田市・旧荻町・旧久住町・旧直入町)に分けて整理すると、以下のようになる。

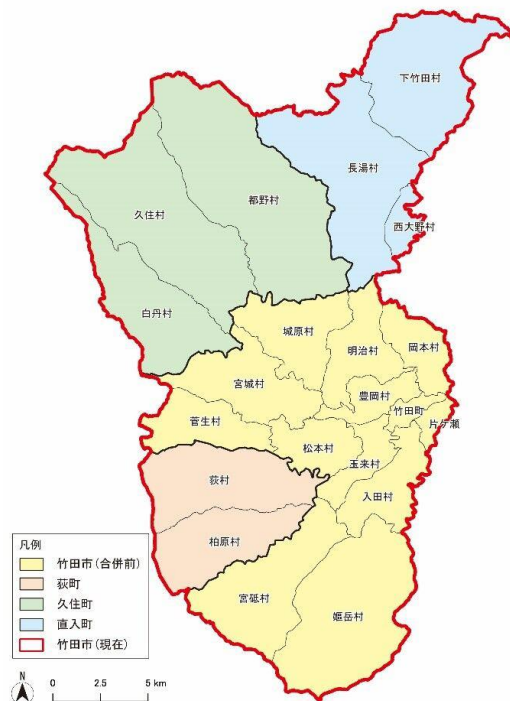
旧荻町の沿革は、明治22年(1889)の町村制施行により恵良原村など7村が合併し荻村となり、柏原村はそのまま柏原村となった。そして、昭和30年(1955)4月に荻村と柏原村が合併し荻町が発足した。

旧久住町の沿革は、明治22年(1889)の町村制施行により5村から白丹村・久住村・都野村の3村となった。大正9年(1920)1月に久住村が町制へ移行して久住町となり、昭和29年(1954)3月に久住町が白丹村を編入合併した後、翌年3月に久住町と都野村が合併し久住都町が発足したが、昭和32年(1957)1月に町名が久住町に変更された。

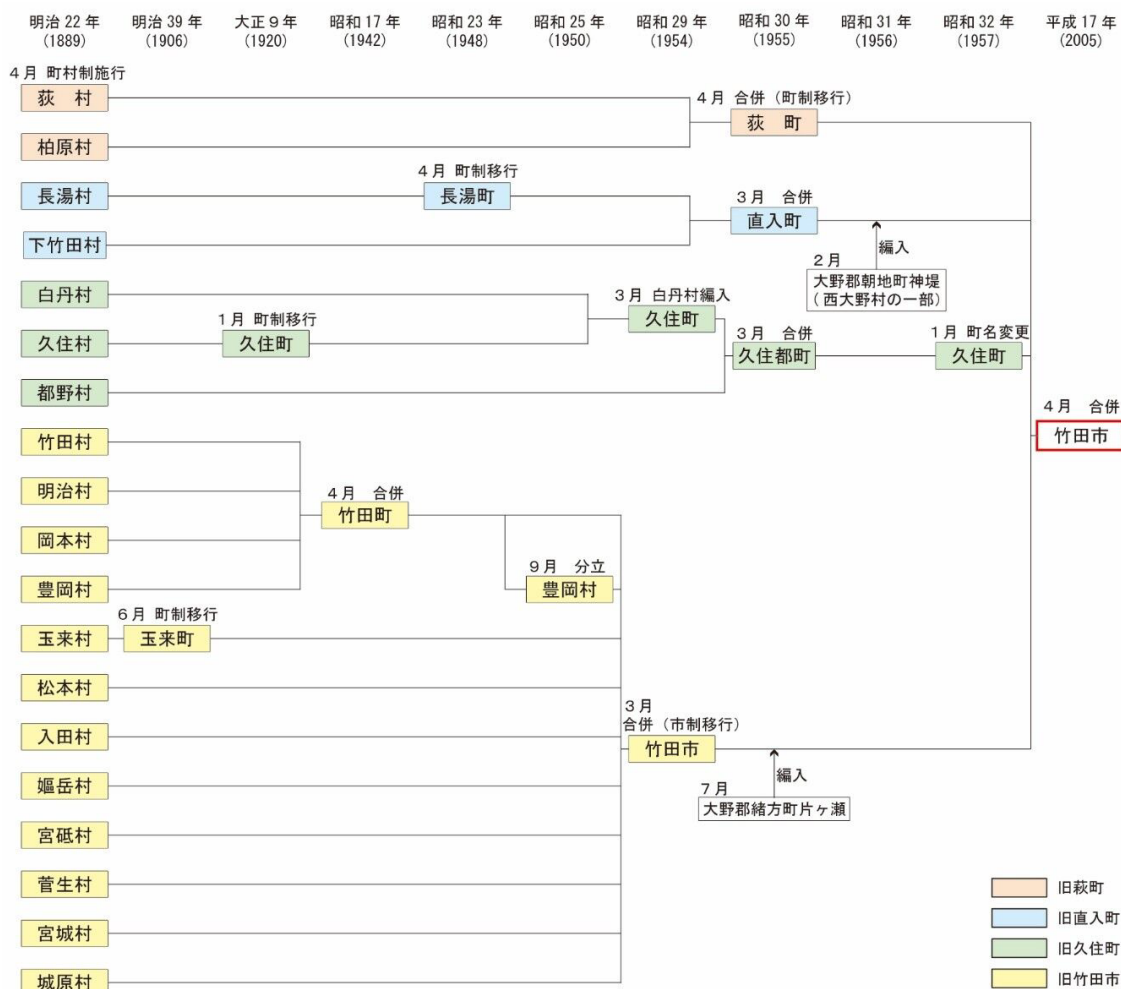
旧直入町の沿革は、明治22年(1889)の町村制施行により上田北村と下田北村が合併し下竹田村となり、長湯村はそのまま長湯村となった。昭和23年(1948)4月に長湯村が町制へ移行して長湯町となり、昭和30年(1955)3月に長湯町と下竹田村が合併して直入町が発足した。

旧竹田市の沿革は、明治22年(1889)の町村制施行により48町村から竹田町・豊岡村・岡本村・玉来村・松本村・入田村・姫岳村・宮砥村・菅生村・宮城村・城原村・明治村の1町11村となり、明治39年(1906)6月に玉来村が町制へ移行し玉来町となった。その後、昭和17年(1942)4月に明治村・岡本村・豊岡村が竹田町に編入されるが、昭和25年(1950)9月に豊岡村が竹田町から分離した。そして、昭和29年(1954)3月に2町8村が合併し市制へと移行、竹田市が発足した。翌年7月には緒方町より旧片ヶ瀬村が竹田市に編入された。

平成17年(2005)4月にこれらの1市3町が合併し、現在の竹田市が誕生した。



竹田市旧行政区範囲図

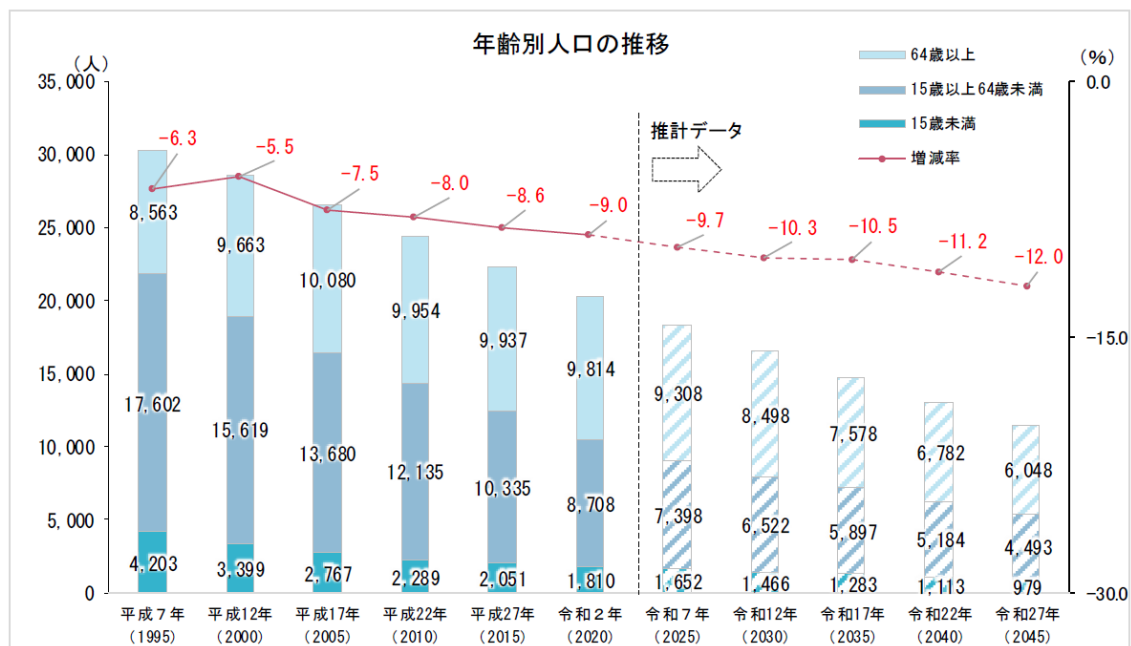


竹田市の沿革

〈人口〉

本市の人口は、令和 2 年 (2020) 国勢調査結果 (総務省統計局) で 20,357 人であった。前回の平成 27 年 (2015) 国勢調査結果 (総務省統計局) では 22,332 人と、5 年間で 1,975 人が減少している (-8.84%)。平成 2 年 (1990) 時点の人口が 32,398 人であったので、30 年間で 12,041 人が減少し、約 37.1% の人口が減少したことになる。年齢層別の人口をみると、64 歳未満の人口は減少する一方で 64 歳以上の人口が増加していて、過疎化と少子高齢化が顕著となっている。

国立社会保障・人口問題研究所の推計では、令和 7 年 (2025) に本市の人口は 2 万人を割り込み、さらに 20 年後の令和 27 年 (2045) に 11,520 人となる見込みである。また、老年人口は今後さらに増加し、令和 7 年 (2025) 以降は半数を越え、さらに 20 年後の令和 27 年 (2045) には 80 歳以上が約 2 割を占める見込みである。

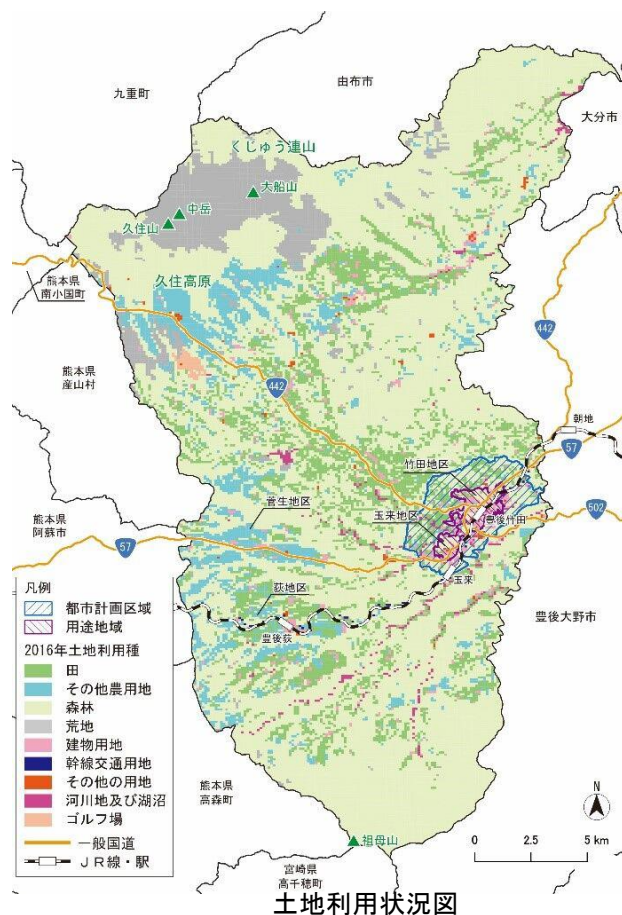


竹田市の年齢別人口推移

〈土地利用〉

本市の市域の多くは農業地域、森林地域、自然公園地域等に指定されている。周囲をくじゅう連山や祖母・傾^{かたむき}山系等の山々に囲まれているため、多くの自然公園地域が分布する。本市の中心市街地である竹田地区や玉来地区は都市計画区域であり、用途地域の指定等により土地利用の規制誘導が行われている。

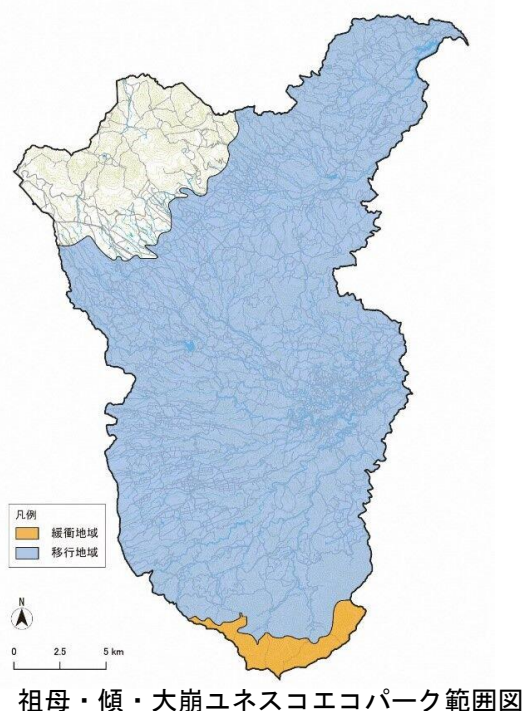
市域のほとんどを森林地域が占めるが、高原や台地上の平地、山の斜面や谷間の傾斜地、河川沿いの平地を利用した農業地域が広がる。基盤整備等の農地整備が行われている地域においては、大規模な農業地帯が形成され、特に台地上の荻地域や菅生地区は農業を主要産業として発展してきた地域であり、高原野菜の栽培が盛んである。



〈自然公園地域〉

本市は、くじゅう連山や祖母・傾山系など、標高1,000mを越える山々に囲まれた自然豊かな地域であり、市域の周辺部は「阿蘇くじゅう国立公園」等の公立の自然公園地域が広がる。昭和9年（1934）に指定された「阿蘇くじゅう国立公園」は、大分県と熊本県にまたがる面積72,678haの国立公園で、本市では山麓の久住高原を含むくじゅう連山一帯が含まれている。九州のほぼ中央部に位置する活発な火山地帯であるが、裾野に広がる高原では野焼き等によって草原の景観が維持され、九州でも有数の観光地となっている。昭和26年（1951）に指定された「^{じんかく じ せりかわ}神角寺^{ぶん ご おお の し あさ じ まち とり}芹川^た県立自然公園^{ぶろい が だけ え ぼ}」は、大分県中部の神角寺（豊後大野市朝地町鳥田）及び芹川を中心とする地域に広がる。豊後大野市の神角寺山・鎧ヶ岳・烏帽子岳などの山岳地域と、直入地区の芹川流域からなる面積10,065haの自然公園である。芹川流域には、長湯温泉・芹川ダム・小津留湧水等の水資源が豊富にある。

一方、大分県と宮崎県にまたがる祖母・傾・^{おおくえ}大崩山系は、急峻な岩峰や数々の溪谷など独特の景観美と原生的な自然を併せ持ち、希少動植物の宝庫としても知られている。自然と人が共生しながら地域が発展していくために、祖母・傾・大崩山系周辺地域の自治体が連携し、「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク」の登録を目指す取組を進め、平成29年（2017）6月に登録地として決定された。また、昭和40年（1965）に指定された「祖母傾国定公園」は、大分県と宮崎県にまたがる山岳地帯で、22,000haの面積を有す。その範囲のほとんどを原生林が占め、カモシカ（国指定特別天然記念物）が生息し、竹田市神原の大野川水系イワメの生息地（国指定天然記念物）もある。国定公園の隣接地には、昭和26年（1951）



に指定された「祖母傾県立自然公園」もあり、その面積は14,123ha である。

〈産業・観光〉

本市の基幹産業は農業である。平成28年（2016）に策定された『第2次竹田市農林業振

興計画』によると、平成18年（2006）時の農業産出額は181億4千万円であり、部門別では畜産48%、園芸33%、米8%の順で産出額が多く、個別農産物では野菜、肉用牛、米の順となっている。高齢化や後継者不足など農業を取り巻く環境が大変厳しい状況にあるにも関わらず、平成14年（2002）以降は農業算出額において大分県内第1位を確保している。米の他、トマト・ピーマン・イチゴ等の施設野菜やレタス・キャベツ・スイートコーン等の露地野菜、アルストロメリア等の花卉、シイタケ、カボス、サフランの栽培が盛んである。また、豊後牛をはじめ畜産農家の評価も高い。

商業については、中心市街地である竹田地区と玉来地区、そして荻地区・久住地区・長湯地区の商店街に商業地が形成されている。特に玉来地区を中心とする国道57号沿いに大型店が出店している。かつては奥豊後の中心地として、隣接する豊後大野市や熊本県阿蘇市等の一部も商圈としていたが、商圈人口の減少や道路交通網の発達、消費者ニーズの多様化等により、市民の購買力のほとんどは大分市等の都市部へ流出している。コロナ禍で落ち込んでいたが、近年は、岡城跡や旧城下町、久住高原、長湯温泉を中心に観光客数が緩やかではあるが増加に転じ、新規出店もみられことから、さらなる観光産業の充実が必要である。

平成22年国勢調査結果（総務省統計局）では、15歳以上の就業者12,420人のうち、サービス業従事者は4,110人（33.1%）で、これまで1位であった農業従事者4,058人（32.7%）を上回った。次いで卸売業・小売業従事者1,383人（11.1%）、建設業従事者894人（7.2%）と続き、上位4業種で84%に達している。平成27年国勢調査結果（総務省統計局）でも、15歳以上の就業者11,424人のうち、サービス業従事者は4,112人（36.0%）で、農業従事者3,489人（30.5%）を大きく上回っている。卸売業・小売業1,241人（10.9%）及び建設業835人（7.3%）はほぼ横ばいで推移している。また、上位4業種の合計は84.7%と高水準を維持している。このように農業における高齢化や後継者不足が急速に進み、担い手の確保が喫緊の課題となっている。

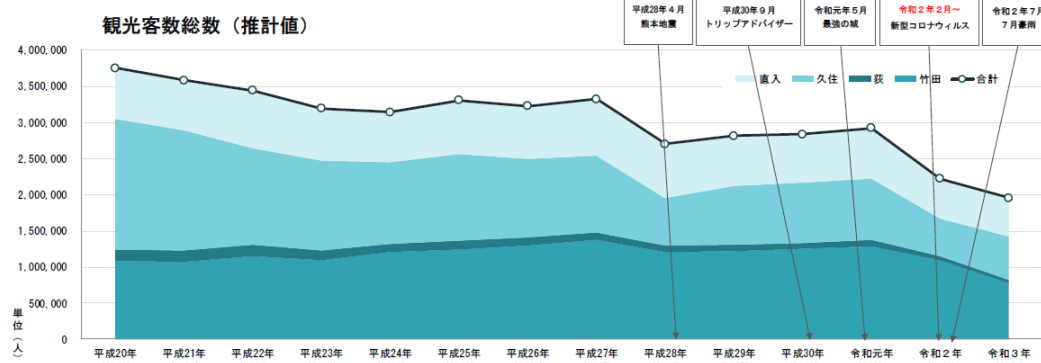
観光面では、本市には、九州を代表する山々が連なり緑豊かな大自然が広がり、それらの山々を源とする豊富な水資源がある。また、岡藩時代に培われた豊かな歴史文化も保持している。これらは重要な観光資源として来訪者を楽しませている。市内中心部では、史跡岡城跡及び往時の趣を残す武家屋敷通りをはじめとする旧城下町が残されている。この旧城下町周辺では、「たけた竹灯籠・竹楽」が開催されており、市内外から多くの観光客が訪れる本市の代表的なイベントとして愛されている。一方、北部の「阿蘇くじゅう国立公園」やその麓に広がる

久住高原を中心としたくじゅう連山や大船山、南部の祖母山への登山客等も多く、久住高原では、DRUM TAOによる和太鼓パフォーマンスも人気である。この他、世界有数の炭酸泉と称される長湯温泉をはじめ、市内各地から多様な温泉が湧出しており、多くの観光客に癒しを与えている。

しかし、観光客の中心は日帰り客であり、市内宿泊客数は観光客全体の約9%と圧倒的に少ない。そのため長期滞在を可能にする観光プログラム等の検討が重要な課題にもなっている。平成18年(2006)を境に減少傾向にあった本市への観光客数は、平成25年(2013)から緩やかな回復傾向がみられたが、平成28年(2016)の熊本地震の影響、そして、令和2年(2020)からの新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、大きな落ちこみを見せた。

竹田市観光客数(推計値)の推移

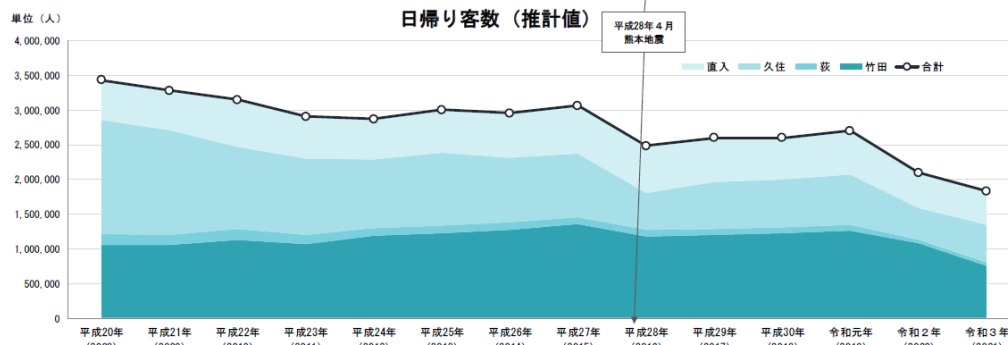
	平成20年 (2008)	平成21年 (2009)	平成22年 (2010)	平成23年 (2011)	平成24年 (2012)	平成25年 (2013)	平成26年 (2014)	平成27年 (2015)	平成28年 (2016)	平成29年 (2017)	平成30年 (2018)	令和元年 (2019)	令和2年 (2020)	令和3年 (2021)
竹田	1,077,763	1,071,959	1,146,996	1,089,646	1,209,507	1,243,248	1,300,086	1,377,610	1,201,720	1,220,943	1,246,303	1,284,348	1,091,040	773,103
萩	162,402	156,921	162,789	138,371	113,464	117,729	110,642	100,718	95,571	89,628	89,999	89,526	58,023	48,008
久住	1,813,643	1,665,979	1,334,948	1,241,502	1,129,767	1,197,579	1,082,842	1,066,115	660,322	812,170	826,393	848,704	520,931	601,971
直入	698,117	689,614	795,676	724,065	687,862	745,936	731,433	776,230	744,000	692,146	672,801	701,101	552,990	531,061
合計	3,751,925	3,584,473	3,440,409	3,193,584	3,140,600	3,304,492	3,225,003	3,320,673	2,701,613	2,814,887	2,835,496	2,923,679	2,222,984	1,954,143



竹田市の観光客数(推計値)の推移

日帰り客数(推計値)の推移

	平成20年 (2008)	平成21年 (2009)	平成22年 (2010)	平成23年 (2011)	平成24年 (2012)	平成25年 (2013)	平成26年 (2014)	平成27年 (2015)	平成28年 (2016)	平成29年 (2017)	平成30年 (2018)	令和元年 (2019)	令和2年 (2020)	令和3年 (2021)
竹田	1,058,040	1,053,281	1,128,218	1,070,118	1,188,612	1,221,935	1,276,728	1,356,627	1,181,854	1,202,530	1,226,341	1,266,389	1,077,180	759,910
萩	153,134	148,144	154,320	129,394	105,474	110,298	103,619	93,695	88,548	82,605	82,657	83,620	56,369	47,165
久住	1,648,431	1,509,519	1,192,992	1,098,126	990,693	1,048,770	933,618	921,224	537,560	675,487	684,240	720,965	454,241	543,034
直入	575,936	573,905	672,516	607,063	583,730	623,060	644,112	695,909	675,257	636,897	606,970	629,564	509,843	483,659
合計	3,435,541	3,284,849	3,148,046	2,904,701	2,868,509	3,004,063	2,958,077	3,067,455	2,483,219	2,597,519	2,600,208	2,700,538	2,097,633	1,833,768



日帰り客数(推計値)の推移

〈交通〉

竹田市の道路網は、市内を東西に走る国道57号が九州の東西を連結する道路として大分市、熊本市の両県都を結び、国道442号は、大分市と久住、熊本県小国町を経て福岡県大川市を、国道502号は、臼杵市から豊後大野市を経て竹田市を結ぶ広域的な道路となっている。竹田市はこれらの国道の中間点として、また近隣の市町村を結ぶ主要地方道の道路交通網の拠点として重要な位置にあたる。また、高規格道路である中九州横断道路の整備も進められ、犬飼IC～竹田IC間が開通しており、引き続き竹田阿蘇道路の整備も進んでいる。

県道は、県道竹田直入線が竹田地域と直入地域、県道庄内久住線が久住地域と直入地域、竹田地域と荻地域は県道高森竹田線で結ばれているほか、県道久住高原野津原線が久住・直入地域を大分市へ結ぶ。

国道・県道以外の道路では、広域農道が荻地域を起点として西北部を通り直入地域まで続いており、南部を緑資源幹線林道宇目小国線が横断する。

鉄道は大分と熊本を連絡するＪＲ豊肥本線が走り、本市はその中間点として、九州中央部の交通の要所として位置付けられる。鉄道駅は豊後竹田駅・玉来駅・豊後荻駅の３駅あり、大分への所要時間は70～90分、熊本へは約100分である。この３駅において最も利用客が多いのは豊後竹田駅である。全体の乗降客数は減少傾向にあるものの、通勤・通学をはじめ、観光振興にも寄与していることから、公共交通機関として重要な役割を果たしている。



竹田市の道路交通網

（３）歴史的環境

〈原始〉

竹田市には旧石器時代から古代までの多くの遺跡が残されており、その調査研究は明治時代の後半からすでに始められている。大正時代には七ツ森古墳^{ななつもり}（昭和 34 年国の史跡指定）の発掘調査と報告書が刊行される等、考古学研究の総合的な調査が行われ、学史・学術的にも大きな成果が残されている。昭和 30 年代後半からは遺跡の分布調査も盛んに行われるようになり、別府大学や竹田高等学校民俗クラブによる各遺跡の発掘調査も行われ、その状況が明らかとなった。昭和 50 年度以降からは記録保存を目的とした発掘調査も開始されることとなる。その成果は、各遺跡の発掘調査報告書に詳細が掲載されているが、大分県を代表する大野川、大分川の各水系による文化の違いが顕著なことがわかってきた。

大野川の源流域である市の西側に位置する荻町や菅生台地では、縄文時代早期に営まれた集落跡や洞穴が調査され、大分県の縄文時代における指標となるヤトコロ式^{かみすこう}や上菅生・下菅生式等の土器が出土しているが、縄文時代晩期から弥生時代前・中期の遺跡や遺物は激減し、空白の時代といつてよい状況となっている。菅生台地での集落がピークを迎えるのは、弥生時代後期～終末に至る時期で、七ツ森古墳群の周辺からは夥しい数の竪穴住居跡^{たてあなじゆうきょあと}とそれに伴う大量の遺物が出土しており、在地色の強い土器が各時期を通じて多く見られる。その中で特筆すべきは、磨製石鏃^{ませいせきざく}の多さと後漢鏡片^{ごかんきょうへん}及び小型仿製鏡^{せうせいきやう}の出土である。石鏃は、当時の生活基盤のあり方を示し、鏡片は権力との繋がり等について分析できる資料となる。ところが、古墳時代になると台地上の巨大な集落は忽然と姿を消してしまい、河川沿いに小さな集落が造られるようになる。菅生台地周辺で見られるこのような問題についての研究は、弥生時代から古墳時代への社会変化を考える重要な資料となり、注目されている。また近年行われた大野川の



菅生台地



下坂田西遺跡（縄文時代後・晩期の集落遺跡）

支流稲葉川周辺での発掘調査では、縄文時代後期から晩期の竪穴住居跡を伴う集落遺跡である下坂田西遺跡や古代の集落跡も確認され、大野川源流域から上流域の様相が更に解明されつつある。

大分川の源流域となる市の北東側にある久住町都野や直入地域の調査では、大野川流域とは異なり、主に弥生時代中期から中世に至る遺跡が多く発見されている。弥生時代中期後半の竪穴住居跡からは、肥後系、北部九州系、大分平野沿岸部の土器とともに石包丁も出土することから広域な交流と比較的早い時期での稲作の開始が想像される。また、弥生時代後期から古墳時代になると大量の鉄器も出土するようになる。集落の中には墓域が計画的に形成され、竪穴住居跡の大きさや副葬品等から支配者層の存在が窺えるようになる。そして古墳時代後期には、南方産のゴホウラ貝製の装身具や鹿角製の装飾が施された剣を副葬した長湯横穴墓群が出現する。

〈古代〉

律令体制下では、現在の竹田市はほぼ全域が直入郡に含まれ、各施設が整備される。郡衙の位置等は不明であるが、駅等の施設と考えられる遺跡やそこを支えたと思われる集落跡が出されており、墨書土器や硯などの遺物が出土している。

和銅6年(713)に朝廷からの命により注進された『豊後国風土記』には「直入の郡、郷は四所 里は十一、駅は一所なり」と記述があり、直入郡には四つの郷があり、駅が1ヶ所あったことがわかる。郷については柏原郷と救覃郷(朽網郷)の記述はあるが、他の二郷の記述がない。『和名抄』には三宅郷・直入郷の記述があり、記載されていない二郷は三宅郷と直入郷であったと推察できる。

柏原郷は現在の竹田市荻町・竹田市菅生一帯、救覃郷(朽網郷)は竹田市久住町都野地区・竹田市直入町一帯、三宅郷は竹田市の東部地域、直入郷は竹田市城原地区・竹田市久住町一帯であったと考えられている。

古代の直入郡はどのような所であったのか、『豊後国風土記』では禰疑野、宮処野など「野」の字が付く地名の記載が目につく。天平8年(736)の『豊後国正税帳』では、直入郡の正税稲穀は他郡に比べ極めて少ないことがわかる。

また、建久8年(1197)の『豊後国図田帳』に記載される直入郡の田数は「田代百六十丁余」と記載されており、豊後国の他の郡に比べると田数が桁違いに少なく、特徴的な記述として牧馬・紫草の管理がある。

このことから、古代の直入郡は、「野」と呼ばれるくじゅう連山及び阿蘇外輪山から広がる広大な高原地域の草地を利用した牧馬と古代における高貴な色の



石田遺跡から出土した墨書土器

染料である紫草の生産を水田の乏しい郡を支える糧としていたと考えられる。

〈中世〉

古代以来、直入郡には牧馬があり、馬を巧みに操る者が多く住んでいた。天長3年（826）の太政官符によると大宰府に選士1,720人が置かれ、この選士のほとんどは弓馬が不得手であったが、「豊後国大野・直入両郡は、騎獵之児を出す」「兵において要となれり」とある。馬を操り、狩獵を得意とする人々がこの地域に多くいたことを示している。

伝承ではあるが、猪鹿狼寺（竹田市久住町）の縁起では、建久4年（1193）に源頼朝が富士の巻狩りを行うに当たり、梶原景高と仁田忠常を阿蘇大宮司へ派遣し、巻狩りの作法を習わせた。二人はその帰り、久住山の山麓で実際に巻狩りを行ったと伝えられている。このようにこの地域には、牧と狩獵の伝統があり、中世まで伝えられてきた。この牧と狩りの世界が、源為朝と緒方三郎惟栄に代表される豊後武士団の登場へと繋がる。

源為朝は、源氏の棟梁源為義の八男として生まれる。為義は嫡男義朝を東国へ派遣し、鎌倉を拠点に東国武士団を源氏の勢力に取り込んでいった。

一方で為朝を九州（豊後）へ派遣し、源氏の勢力の扶植に努めた。為朝は「豊後おとなしがはら」に居住したとされる。

「おとなしがはら」の地名は現在残されていないが、直入郡から玖珠郡にかけて源為朝の伝説が数多く残されており、直入・玖珠郡に広がる草原地帯に為朝の拠点があった可能性が高いとされている。

なぜ、為朝は豊後国府から遠く離れたこの地に拠点を置いたのか、その時代直入・大野両郡は豊後大神氏の一族である緒方氏・大野氏の本拠地であった。大野氏の系図によると為朝ははじめ玖珠郡に居住し、直入郡騎牟礼に城を築き、その後三宅郷へ移ったとされ、豊後大神氏も為朝の配下となったと推察される。

為朝は草原地帯の馬の扱いに巧みな一族を配下にするため、この地へ入ったと思われる。この一族から源平合戦で活躍し「平家物語」に語られる、豊後国において大きな力を持った武士団の棟梁である緒方三郎惟栄が登場する。緒方三郎惟栄は反平家として活躍し、大宰府から平家を追い落とし、平家方に与した宇佐大宮司を攻撃し、平家追討軍の源範頼の軍を九州へ渡す支援を行うなど、平家滅亡に大きな貢献をした。しかし、源頼朝と仲違いをした源義経を九州へ迎えるため播磨国大物浦を義経と共に出航したが捕らえられ、上野国沼田荘へ流され、豊後大神氏の勢力は衰退してゆく。岡城は、緒方三郎惟栄が義経を迎えるために築城したと伝えられる。



源為朝が築城されたとされる騎牟礼城跡

鎌倉時代になると、大友氏が豊後国守護として入部する。大友氏は一族を豊後国各所の地頭として任命し、志賀氏や入田氏、朽網氏など大友氏一族が台頭しはじめ、大友体制下では在地による領国経営を行い周辺からの侵攻に備えて広大な山城を形成する。

志賀氏は大友初代能直の八男能郷を祖とし、延応2年(1240)大野荘志賀村(朝地町)半分地頭職を譲られて土着し、志賀氏を名乗るようになった。この志賀氏と直入郡との関係は、南北朝の動乱期の建武3年(1336)玖珠城の戦いに端を発する。玖珠城の戦いにおいて反旗を翻した大友7代氏泰の兄貞順(南朝方へ)に加担した入田郷を半分ずつ知行する入田氏、出羽氏は戦死し、北朝方に没収された。その後、入田郷の所領は降参半分の法により、入田氏、出羽氏の所領は以前の半分とされた。入田郷の所領4分の1をそれぞれ知行する権利を残したことになる。

しかし、戦死した出羽宗雄の子(宗房)が幼いため、宗雄の妻は、宗房の扶助を志賀頼房に依頼して、成人になっても扶助し、志賀氏に従うことを約束している。後の正平13年(延文3年・1358)、その所領は志賀氏に譲与された。

これにより、志賀氏は直入郡に所領を持つようになったが、本格的な直入郡進出は直入郷代官職と検断職(刑事犯人の検察・断罪)を預けられた応安2年(正平24年・1369)以降と考えられる。また、大船山の山裾に築かれた山野城は、朽網氏に関連する山城であり、その麓の上城遺跡からは朽網氏の館跡と考えられる屋敷地を区画する溝とその内側に夥しい数の建物跡が検出された。各遺構の内部からは、大友氏により盛んに行われた海外との交易によりもたらされた外国の輸入陶磁器が大量に出土している。

大友氏による豊後支配は大友21代義鎮(宗麟)のときに最盛期を迎え、豊後府内は大友氏拠点として西日本有数の都市として栄え、キリシタン大名であった義鎮によりキリスト教の布教が盛んに行われた。豊後には5万人の信者が数えられたとされる。直入郡でも布教が行われ朽網(現直入町長湯・久住町都野)では布教のための施設が設けられたと伝えられており、直入町原には「INRI」と記されたキリシタン墓が現存する。大友氏の支配も天正14~15年(1586-1587)の島津氏の豊後侵攻によりその支配体制の衰退を招き、文禄2年(1593)大友22代義統は文禄の役における朝鮮半島での失態を理由に豊臣秀吉より豊後国を取り上げられ、大友氏の豊後支配は終焉を告げた。



「INRI」が刻まれる原のキリシタン墓

〈近世〉

大友氏の除国後、文禄3年(1594)に播州三木（兵庫県）より中川秀成がこの地へ入部し、大友氏と共にこの地を去った志賀氏の居城に入城し、領国経営のための施策を展開する。秀成は入部後まもなく城の造営に着手する。天神山を本丸とし、西側の岡村の辺りに上級家臣の屋敷を設け、志賀氏時代の大手門であった下原門を搦め手とし、城の西南に大手門、北側に近戸門を新たに開いた。



3代藩主中川久清により寛文4年(1664)西の丸が造営され、岡城

「御城真景図」に描かれた岡城

は急速に中世の山城から近世城郭へと移り変わっていった。岡城の築城と同時に城下町の建設も行われた。城下町の設置場所は稲葉川の氾濫により沼沢を形成していた。これを造成して城下町の基盤が形成され、町割りがなされた。町割りは中央に町家群を配し、これを取り囲むように北から西にかけて寺が配置され、北、東、南側に武家屋敷が配置された。

町屋は主に本町、新町、府内町、田町、上町の5町をもとに構成されていた。本町は家数87軒、新町の家数51軒、同じく府内町54軒、田町54軒、上町44軒の家数で、都合290軒によって町屋が構成されていたようである。これらの町家の住人は入部時同行者では不足、現玉来地区（城下町の南東約2km）から本町へ53軒分を移し、他は十川地区（城下町の西約2km）からも移住させている。

以上が当初の城下町の形成状況であるが、その後寛文5年(1665)に古町が新たに造営され、城下町の拡大をみている。古町は古くから百姓等が住んでいた地区であり、これに町割りを施し、城下町を拡張している。

古町を除く当初建設された町割りは東西に長いほぼ長方形の区割りを基調としている。南北通り筋は西側から本町筋、新町筋、横町通でそれぞれの町が構成され、東西通り筋では南側から上町筋、田町筋、府内町筋にそれぞれ町が形成されている。上町筋及び田町筋は本町筋と接しT字路を形成している。

また、新町筋と府内町筋もT字路を形成している。新町筋に対し、上町筋や田町筋は交差している。従って新町に対して上町や田町といった町の区域も交差している。この町の区域の交差をみると、南北に通る新町が東西に通る上町、田町を切ったように延び、本町も同様であることから、町割りでは東西筋に対して南北筋が優位であることが理解できる。古町の町割りはほぼ方形を基調として行われており、中央の北西から南東にかけての道筋を中心として長く古町が形成されている。この古町には2条の南東・北西方向の道筋が交差している。また、古町を中心として、その両側には武家屋敷が配置されていた。



岡藩の城下町（□ は町家 ○ は武家屋敷）

城と城下町の整備に加え岡藩政の確立のため、領内の検地や木浦・尾平鉦山の開発も実施し、3代藩主久清は熊沢蕃山を岡山から招き山林や水利問題などの政策を講じたと云われ、三宅山・保全寺山・城原山などの植林や城原井路・緒方井路などの灌漑水利施設の建設が実施され、領内の生産性の向上が図られた。また、天明3年（1783）に竹田城下町を訪れた備中国（岡山県）の古河古松軒は「町は大概よきまちにして諸品自由の地なり、（中略）萬事此城下ならでは調ひかたき故に、何に不足なきように商人たくはへ置とみたり、寺院も数多く見へ侍りぬ」（「西遊雜記」）と竹田城下町の繁栄ぶりを伝えている。

岡藩中川氏は、多くの大名が改易・転封を繰り返すなか13代、約270余年の間、この地域の支配を行った。城下町竹田は江戸時代以降、奥豊後の政治・文化の拠点として栄え、田能村竹田・瀧廉太郎・朝倉文夫・広瀬武夫などの偉人を数多く排出している。

〈近代現代〉

明治4年（1871）、廃藩置県により岡藩は岡山県となりその後大分県直入郡と定められ、行政区画が定められた。明治10年（1877）に起こった西南戦争では、西郷軍の一隊が竹田町を占拠し竹田市街地を中心とする地域で西郷軍と政府軍の激しい戦闘があり、1,200戸以上の家屋が焼失する被害が出た。

江戸時代以降、城下町竹田は町家が密集しているため、たびたび大火に見舞われ多くの町家が火災の被害に遭っており、町内に水を引き、生活用水や防火用水に活用することが長年の懸案とされてきた。明治13年(1880)に玉来川の水を隧道で竹田町へ引込み稲葉川に注ぐ稲葉川疎水が完成し、町内の用水の確保が可能になった。

この豊富な水資源を活かし四山社製糸工場の水車への利用、明治32年(1899)に設立された竹田水電株式会社により竹田町・玉来町・豊岡村へ大分県初の電力供給が行われ、その後真門庵に第2発電所、宮砥村に第3発電所が建設され、周辺の13町村に電力を供給するなど、産業基盤の振興へつながった。

大正6年(1917)に竹田一犬飼(豊後大野市)間の乗合自動車定期便営業開始後、宮地(熊本県阿蘇市)・三重(豊後大野市)・久住などとの路線整備が竹田町を中心に整えられた。大正13年(1924)には豊肥線豊後竹田駅が開業し、機関庫・転車台・給水設備・給炭設備などを有する大分ー熊本間の重要な駅として整備された。

また、竹田地域の地形は起伏があり水田耕作には適地とはいえない厳しい地理条件であるが、市内各所に水田が開かれ随所に棚田などの風景が見られる。これは灌漑設備の発達によるもので規模の大きな灌漑設備が数多く造られている。これらの灌漑設備は、岡藩3代藩主中川久清が万治3年(1660)に熊沢蕃山を招き、その意見を取り入れて城原井路(寛文2年:1662竣工)や刈小野井路(元禄3年:1690頃竣工)などの灌漑設備の開発を進めたことに起因し、その後の藩主もこの政策を引き継ぎ藩政時代に多くの灌漑設備整備されたほか、音無井路(明治25年:1892竣工)や明治岡本井路(昭和11年:1936竣工)など明治・大正期に完成されたものもある。

灌漑設備の整備により市内各所に水田が形成されていったが、河川流域の狭



町家が密集した城下町竹田(大正～昭和初期)



竹田水力発電所 第1発電所(明治末期)



四山社・竹田水力発電所・銀行位置図

小な谷底平野や傾斜地を利用した水田であり一筆あたりの水田面積が狭く、労働生産性が低いため水田の基盤整備事業が早くから望まれていた。

昭和50年代以降現在まで水田や畑地の県営や団体営による農業基盤整備事業が行われ労働生産性の向上や農道・用排水施設の整備が行われている。水田耕作に向かない高冷地では畜産業が明治時代以降盛んに行われ、大分県内有数の畜産地域を形成しているほか、高冷な気候を活かしたトマトやキャベツなど野菜の一大生産地となっている。このように水利開発・交通網整備・農業基盤整備など諸産業の産業基盤の整備が行われ、竹田地域は奥豊後の中心地として発展していった。

竹田地域は祖母山北麓・阿蘇外輪山東側傾斜地・くじゅう連山南麓地域からの水が大野川に集まる集水地域にあたり、明治以降たびたび記録的な豪雨被害に見舞われている。記録では明治2年(1869)6月、大正12年(1923)7月、昭和28年(1953)6月、昭和57年(1982)7月、平成2年(1990)7月、平成5年(1993)9月、平成24年(2012)7月に大きな豪雨被害を受けている。豪雨災害により甚大な被害をなくすため昭和57年以降河川改修事業や治水ダムの建設が進められ、平成22年に稲葉ダム、令和4年には玉来ダムが完成した。



平成24年7月の九州北部豪雨による竹田文化会館周辺被災状況

〈人物〉



ながわひでしげ
中川秀成 元亀元年（1570）～慶長17年（1612）

通称は小兵衛。摂津国（現在の大阪府の一部）の戦国武将中川清秀の次男。天正11年（1583）に父清秀が賤ヶ岳で、天正20年に兄秀政が朝鮮で戦没すると中川家の家督を継承し、播磨国三木城主となる。このころ豊臣秀吉の命により父を討った佐久間盛政の娘虎（洞仙院）と結婚する。文禄2年（1593）11月に豊後国岡への転封を秀吉から命じられ、翌年2月に岡に入部し、初代岡藩主となる。また、岡入部直前に従五位下修理大夫に叙任される。近隣の太閤蔵入地代官と連携して豊薩戦争・朝鮮出兵により荒廃した領内の立て直しをはかりながら、支配の拠点として岡城、城下町竹田を建設した。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いにおいては、一時西軍への関与を疑われるが、西軍方の臼杵城主太田一吉を攻めることで所領を安堵される。慶長17年（1612）8月14日、岡城本丸において急死する。生前禅学修行の場所を建設する予定であった土地には、菩提寺碧雲寺が建てられた。



ながわひさきよ
中川久清 慶長20年（1615）～天和元年（1681）

通称は瀬兵衛。官位は従五位下山城守。第2代岡藩主中川久盛の長男として生まれる。父久盛の死により、承応2年（1653）藩主となる。初名は久秀、後に久清と改名。

藩主就任後、領内検地を行い生産力の把握につとめると共に、諸制度の改革を行い藩政の整備に力を尽くした。そのため「中興の祖」とも呼ばれている。万治3年（1660）には、岡山藩から陽明学者熊沢蕃山を招き、その指導の下で植林や水路開削などの政策を行った。在任中に岡城西の丸御殿を建設。隠居後はそこに居住し、藩政に強い影響力を持ち続けた。

藩政を整える一方、隠居後は入山と号するほど山を愛し、しばしば大船山（竹田市久住町）に登山した。久清は足が不自由だったため、人に背負わせた人鞍に乗って登ったと伝えられている。大船山をこよなく愛した久清は、自分の墓所を大船山に設けるように命じた。久清は遺言どおり大船山に葬られ、現在も儒教の形式に則った久清の墓所がある。



田能村竹田 たのむらちくでん 安永6年(1777)～天保6年(1835)

諱は孝憲。いみな たかのり通称は行蔵。号は竹田、遠声楼主、九疊外史など多数。岡藩の侍医田能村碩庵の次男。

家業であった医者を経がず、寛政10年(1798)22歳のときに藩校由学館に出仕を命じられ学問専攻となる。同じころ、唐橋君山主宰の米船社・竹田社に加わり詩画に親しみ、淵野真斎から多くの影響を受けた。その後、「豊後国志」編纂御用掛、由学館頭取並を経て、文化10年(1813)に隠居する。

竹田は詩学の才能にすぐれ、各地の文人たちと幅広い交友関係を築いた。文政元年(1818)に頼山陽が竹田荘を訪問したことにより、全国的にその名声を高めた。

詩集「自画題語」や絵画論「山中人饒舌」や茶本「泡茶新書三種」など幅広い分野の著作を残す。また、文化5年(1808)ころから作画に取組み始め、隠居後に本格的に南画制作を行った。各地の画人たちとの交流を通して独自の作品世界(豊後南画)を展開した江戸後期を代表する南画家である。

遊歴先の大坂で客死。大坂の浄春寺に葬られた。また、遺髪を納めた墓碑が竹田市茶屋ノ辻にある。田能村竹田の旧宅である旧竹田荘は国指定の史跡に指定されている。



田能村直入 たのむらちよくにゅう 文化11年(1814)～明治40年(1904)

竹田市寺町に生まれる。本姓は三宮、通称伝太、名は癡。号は直入、小虎など。

田能村竹田に画を学び、天保5年(1834)に大坂にて大塩平八郎の洗心洞に入門。竹田没後に京都へ上った。

明治に入り各種展覧会で活躍する一方、京都府画学校[明治13年(1880)開学]設立に尽力し摂理(校長)として運営にあたるなど、関西南画界の重鎮の1人として多方面で活躍した。

また、明治17年(1884)、南宗画学校を創立し、田近竹邨など後進の育成に努めた。



ひろせ たけお
廣瀬武夫 明治元年（1868）～明治 37 年（1904）

ひろせ しげたけ
岡藩士廣瀬重武の次男として竹田市茶屋ノ辻で生まれる。武夫は、父重武が明治維新後、裁判官として任務地を単身で転々とし、母は武夫が 8 歳のときに死去したため実質は祖母智満子に育てられた。

明治 10 年（1877）5 月、西南戦争により家が焼失したため、廣瀬家は父重武の赴任地である岐阜の飛騨高山へ住居を移した。

明治 18 年（1885）、海軍兵学校に入学。明治 22 年（1889）、海軍兵学校卒業後はハワイやオーストラリアへの遠洋航海で訓練を重ねる。明治 26 年（1893）には水雷術練習所に入り、同年に首席で卒業。その後も海軍で経験を積む。

明治 30 年（1897）6 月、武夫はロシア留学を命じられ、9 月からロシアのサントペテルブルクで留学生として生活を始めた。明治 32 年（1899）4 月からはロシア駐在員として、ロシア国内および近隣諸国への視察を仕事とし、イギリス・フランス・ドイツへと赴く。明治 34 年（1901）10 月に帰朝命令が下ると、翌年の 1 月よりシベリアを通るルートで帰国する。スレチェンスク～ハバロフスク間（約 2,206 キロ）はソリ車にて極寒のシベリアを通行した。

明治 37 年（1904）2 月 10 日に開戦した日露戦争では、軍艦「朝日」に乗船。同年 3 月 27 日に決行した第二次旅順港閉塞作戦にて、武夫は作戦遂行中にロシア軍の砲弾が命中し、戦死。死後、武夫は軍神として祀られ、昭和 10 年（1935）に廣瀬神社が竹田町に創建された。



たき れん た ろ う
瀧廉太郎 明治 12 年（1879）～明治 36 年（1903）

たきよしひろ
旧日出藩士瀧吉弘の長男として東京で生まれる。父は内務省勤務。職業柄、横浜→富山→東京→大分→竹田と転任を繰り返し、廉太郎もそれに伴い一緒に各地を転々とする幼少期を過ごした。

明治 24 年（1891）11 月、吉弘が大分県直入郡長に任命されたことにより、翌月一家で竹田町溝川の郡長官舎に転居。廉太郎は、明治 27 年（1894）年 4 月に直入郡竹田高等小学校を卒業するまでの 2 年 4 ヶ月を竹田で過ごすことになった。多感な少年期を竹田で過ごした廉太郎は、南画家・佐久間竹浦ら多くの友人に恵まれ、短い期間ながらも竹田の町は彼にとって思い出深い町の一つとなった。

幼い頃から音楽に関心が高く、自己流のヴァイオリンやハーモニカを友人の前で演奏していた。また、竹田時代にオルガン演奏を小学校の新任教員である渡

^{なべよし お}
邊由男に学んだ。

高等小学校卒業後の明治 27 年（1894）9 月、最年少の 16 歳で高等師範学校附属音楽学校（後の東京藝術大学）に合格した。

演奏および作曲活動の出発点は明治 30 年（1897）、専修部 2 年生のときからである。研究科時代（明治 31～33）には、演奏会での活動が充実しており、独奏する回数が増えるなど、音楽家としての将来が嘱望されていたことがうかがえる。作曲活動においては、『荒城の月』、『花』、『箱根八里』などの代表曲をはじめ、『お正月』などの文部省唱歌やピアノ曲など日本近代音楽草創期において多彩な才能を発揮した。

明治 34 年（1901）に 3 年間の予定でライブチヒへ留学したが、滞在先で結核を患ったため翌年帰国。大分で療養するも、明治 36 年（1903）6 月 29 日、23 年と 10 ヶ月の短い生涯を閉じた。



^{は ばらゆうきち}
羽原又吉 明治 13 年（1880）～昭和 46 年（1971）

経済史学者。漁業経済史の開拓者。慶応義塾大学で長く教員を勤めた。竹田市久住町都野の漢方医^{は ばらいたる}羽原到の長男に生まれる。竹田小学校では瀧廉太郎と同級生。熊本^{せいせいこう}済々黌を経て東京帝国大学理学部で生物の研究を行う。大学卒業後、北海道庁に赴任する。道庁の調査員として漁村のアイヌの人々と接するうちに漁業の経済研究を行うようになる。羽原の研究の特徴は、それまで技術面が中心であった水産学において、新たに漁民の生活の立て方の変遷や流通面を解明したことにあつた。昭和 25 年（1950）に『近世日本水産業の発展過程に関する経済史的研究』で慶応義塾賞を受賞し、同年経済学博士となる。翌年には日本漁業経済史の研究に対し、朝日文化賞を受賞。昭和 30 年（1955）に『日本漁業経済史の研究』全 4 巻に学士院賞が贈られる。晩年の昭和 43 年（1968）に郷里都野に戻り、余生を過ごした。



^{あさくらふみ お}
朝倉文夫 明治 16 年（1883）～昭和 39 年（1964）

彫刻家。東京美術学校（現東京藝術大学）教授。文化勲章受章者。豊後大野市朝地の^{わたなべようぞう}渡辺要蔵・キミの三男として生まれる。10 歳で同市朝倉種彦、ツ子の養子となり、旧制大分中学竹田分校（現竹田高等学校）に進学。明治 35 年（1902）に中退して、兄の^{わたなべおさ お}渡辺長男を頼って上京、住み込みながら彫刻の技術を学んだ。翌年、東京美術学校に入学、また太平洋画会研究所にも通った。このときから師の^{いわむらとおる}岩村透の教えで徹底した写実主義をとるようになる。朝倉作品は流麗な

がら写実に基づくわかりやすさが特徴で、描写力は抜群だった。

美術学校卒業時に東京都台東区にアトリエを新築し、朝倉塾を開設。学資に困る学生らを内弟子として教育した。



さとうよし み
佐藤義美 明治 38 年（1905）～昭和 43 年（1968）

詩人。童謡童話作家。竹田市はさだ挾田の生まれ。「いぬのおまわりさん」の作者。竹田中学校に在学中の大正 9 年（1920）に父の転勤に伴い横浜第二中学校へ転校する。このころから詩や童謡の創作を開始する、東京に転居後は雑誌『赤い鳥』などへ投稿する。大正 14 年（1925）、早稲田第二高等学院の英文科に入り、石川達三らと同人誌『ばらぬすつと薔薇盗人』を出す。このころに「グッドバイ」を発表する。昭和 7 年（1932）に大学院を修了して教職につくと同時に本格的な創作活動にも入る。次々に作品を発表し、昭和 16 年（1941）には教職を退くが、詩作は続け、生涯の作品数は 3000 編にのぼる。金子みすずを評価したことでも知られる。



いけまつたけ のすけ
池松武之亮 明治 45 年（1912）～平成 2 年（1990）

医学博士。いびきの研究家。熊本県津奈木村つなぎ出身。父親が荻町で開業するのに伴い、荻小学校に転校する。旧制竹田中学校、大邱医学専門学校（韓国）を卒業して東京通信病院などを経て、昭和 17 年（1942）千葉県野田市で開業する。いびき研究の契機は、昭和 27 年（1952）春、いびきが原因で嫁いだ初日に離婚された花嫁を治療したことであった。その後手がけた手術は 8000 人にもものぼり、昭和 62 年（1987）7 月にパリで開催された第 1 回世界いびき学会で名誉会長に就任した。文化面でも活躍し野田市文化団体会長などを歴任する。また、郷土荻町へ文化財資料館建設基金として長年多額の資金を寄付した。

2. 竹田市の文化財の現状と特性

(1) 文化財の現状

現在（令和6年3月時点）竹田市にある指定等文化財は248件あり、その内訳は国指定等が33件、県指定等が36件、市指定が179件となっている。

			国			県		市	総計
			指定	登録	選択	指定	選択	指定	
有形文化財			3	18	—	16	—	84	121
		建造物	2	18	—	6	—	41	67
美術 工芸 品	絵画		0	0	—	4	—	3	7
	彫刻		0	0	—	6	—	24	30
	工芸品		1	0	—	0	—	9	10
	書跡		0	0	—	0	—	0	0
	典籍		0	0	—	0	—	0	0
	古文書		0	0	—	0	—	4	4
	考古資料		0	0	—	0	—	3	3
	歴史資料		0	0	—	0	—	0	0
民俗文化財			0	0	0	3	1	31	35
		有形の民俗文化財	0	0	—	0	0	6	6
		無形の民俗文化財	0	0	0	3	1	25	29
記念物			10	1	—	16	—	64	91
		遺跡	4	0	—	5	—	37	46
		名勝地	0	1	—	1	—	3	5
		動物、植物、地質鉱物	6	0	—	10	—	24	40
総計			13	19	—	35	1	179	247

※6類型のうち、無形文化財、文化的景観、伝統的建造物群は指定等実績なし。

※令和6年（2024）3月末時点での数値

以下主なものについて記述する。

① 国指定文化財

竹田市にある国指定文化財 13 件のうち、重要文化財が 3 件、史跡が 4 件、特別天然記念物 1 件、天然記念物が 5 件となっている。

○重要文化財

〈願成院本堂〉 がんじょういんほんどう

願成院本堂（愛染堂）は、寛永 12 年（1635）に建立された、桁行 3 間、梁行 3 間、宝形造、本瓦葺の比較的小規模な仏堂であるが、三手先斗供、二軒扇垂木など、手の込んだ構造を用いており、内部に柱を立てず、丸桁上に梁を架けわたさない構造を採用している。細部では隅の肘木に鬼面を彫り、隅の持送の上に邪鬼の彫刻を置いて隅木を支え、尾垂木上の各斗の斗尻には、別木を差し込んで皿斗にみせかけるなど特徴的な手法が用いられている。内部の内法長押上には極彩色の天人像が描かれている。

〈銅鐘〉

美術工芸品では、「十字章」と「HOSPITAL SANTIAGO 1612」の銘が刻まれた南蛮鐘である銅鐘。

○史跡

〈岡城跡〉

岡城跡は、文治元年（1185）に源平の雄緒方三郎惟義が源義経を迎えるため築城したとの伝承があり、さらに、建武年中（1334～1337）に大友の支族である志賀貞朝が拡大したと云われている。しかし、これを裏付ける正確な資料はなく、今日の岡城の前身となる城は、応安 2 年（1369）ころに志賀氏の居城として築城されたとされる。文禄 3 年（1594）に播州三木（兵庫県）より中川秀成がこの地へ入部し、現在残される平山城形式の城郭が造られた。城内には、本丸跡・二ノ丸跡・三ノ丸跡・西の丸跡の外にも櫓跡・家老屋敷跡・武家屋敷跡・足輕屋敷跡など、天然の地形を生かした数多く遺構が存在している。



願成院本堂（愛染堂）



願成院本堂内部に描かれた天人



岡城跡全景



岡城跡三ノ丸跡石垣

○天然記念物

〈カモシカ〉

市南部の祖母山系に生息する特別天然記念物カモシカ

〈大船山のミヤマキリシマ群落〉

九州地方の特産種であり丘陵地の火山地帯の風衝地に群落をつくるミヤマキリシマの代表的群落である大船山のミヤマキリシマ群落。

②県指定文化財

大分県指定文化財 37 件のうち、有形文化財が 17 件、無形民俗文化財が 4 件、史跡が 5 件、名勝が 1 件、天然記念物 10 件となっている。

○有形文化財

〈岩戸橋〉

嘉永 2 年(1849)に架設された石橋である岩戸橋、天文 18 年(1547 年)の銘のある円福寺石幢など石造物が 5 件、美術工芸品では中川家歴代藩主肖像画など絵画が 5 件、彫刻が 6 件となっている。岩戸橋は、嘉永 2 年 10 月に架設のアーチ型の石橋で、橋長 28.2m、幅 4.40m、高さ 18.00m、橋台 11.40m を測る。大分県下で 3 番目に古い石橋である。



岩戸橋

○無形民俗文化財

〈宮砥神楽〉

宮砥神楽は、寛文 10 年(1670)の記録に神楽殿を改造した事が記されていることから、17 世紀末に神楽が存在したことが推測され、大野川流域に存在する神楽の中では最も古く成立したとされる。神楽面の記録などから、その創始は中世まで遡ると考えられている。他の流派の神楽が演劇化されていく中で、現在も享保 3 年(1719)の文献に見られる演目を、古い形で保ち続けている、伝統を重んじた神楽であり、衣装は、狩衣が多用され、舞方も古い様式を残している。



宮砥神楽

○史跡

〈キリシタン洞窟礼拝堂〉

キリシタン洞窟礼拝堂は、建設年代は不明であるが、岩壁をノミでくりぬいたみごとなものであり、内部は約 10 m²でドーム型の天井の最高部は約 3.5 m²に達する。正面には祭壇状の彫り込みがあり、土色をもって彩色が施されている。腰の高さほどのところの壁の周りに丸太を通して床を張るためのくぼみが作られている。正面入口の裏側には両隅に直径 20 cm 以上の木柱が仕組まれて扉を閉めるようになっていたものと思われる。豊後キリシタン布教地の一中心地であった志賀・朽網の状況を偲ばせるキリシタン洞窟礼拝堂。



キリシタン洞窟礼拝堂

〈西光寺境内〉

岡藩主中川家ゆかりの寺である西光寺境内、凝灰岩の壁面に五輪塔中に座す観音菩薩、大日如来を線刻で表現した長湯線刻磨崖仏及び梵字石、T字型の墓碑に「INRI」の文字を彫り込んだ原のキリシタン墓碑や縄文時代の人骨や大理石製のケツ状耳飾りが出土した野鹿洞穴が存在している。

○名勝

〈納池公園〉

湧水地の周辺を杉、タブ、カシの古木が生い茂る日本式庭園である納池公園がある。元徳 2 年（1330）に白丹南山城主志賀義天公の遊園地に利用されたのに始まり、江戸初期には肥後藩主加藤清正も公衆の遊樂地にしたという。明治 6 年（1873）太政官布告により東京の浅草・上野・京都の嵐山などと並んで地域公園とされた由緒ある公園である。更に大正 13 年（1924）には大分県 13 景の一つに選ばれた。



納池公園

③市指定文化財

市指定文化財 177 件の内訳は、史跡 36 件、名勝 3 件、天然記念物 25 件、無形文化財 1 件、無形民俗文化財 25 件、有形文化財 81 件、有形民俗文化財 6 件となっている。市指定文化財の約 45%が有形文化財となっており、有形文化財のうち 15 件が建造物、25 件が石造物、仏像・絵画等が 41 件となっている。

○建造物
〈円通閣〉

長屋門形式に中国風意匠の門扉を配した円通閣、漢学者唐橋君山等の文人たちが集う場所として使われていたとされている。寛政10年（1798）に、田能村行蔵（竹田）らが、藩命により『豊後国志』を、この円通閣に集い、編纂したといわれています。

○史跡
〈御客屋敷〉

岡藩営の宿泊所であり、別名鴻臚館、聴雨亭とも称されている。棟札により文化2年（1805）に建築されたことがわかる。宿泊者としては、文化7年（1810）に幕府測量方の伊能忠敬が岡領内測量のため宿泊している。



円通閣



御客屋敷

④登録文化財

○登録記念物（名勝）

〈白水の滝〉

荻地区の大野川の最上流部に位置し、阿蘇溶結凝灰岩の峻険な岩盤を伝いに流れる幾多の滝筋により構成される。



白水の滝

⑤指定以外の文化財

竹田市には、未指定であるが、数多くの文化財が存在する。

〈音無井路 12 号分水（円形分水）〉

明治25年（1892）に竣工した音無井路の、受益地へ水を適切に配分するために造られた、12か所の窓を設けた特異な構造の12号分水（昭和9年完成（1934））



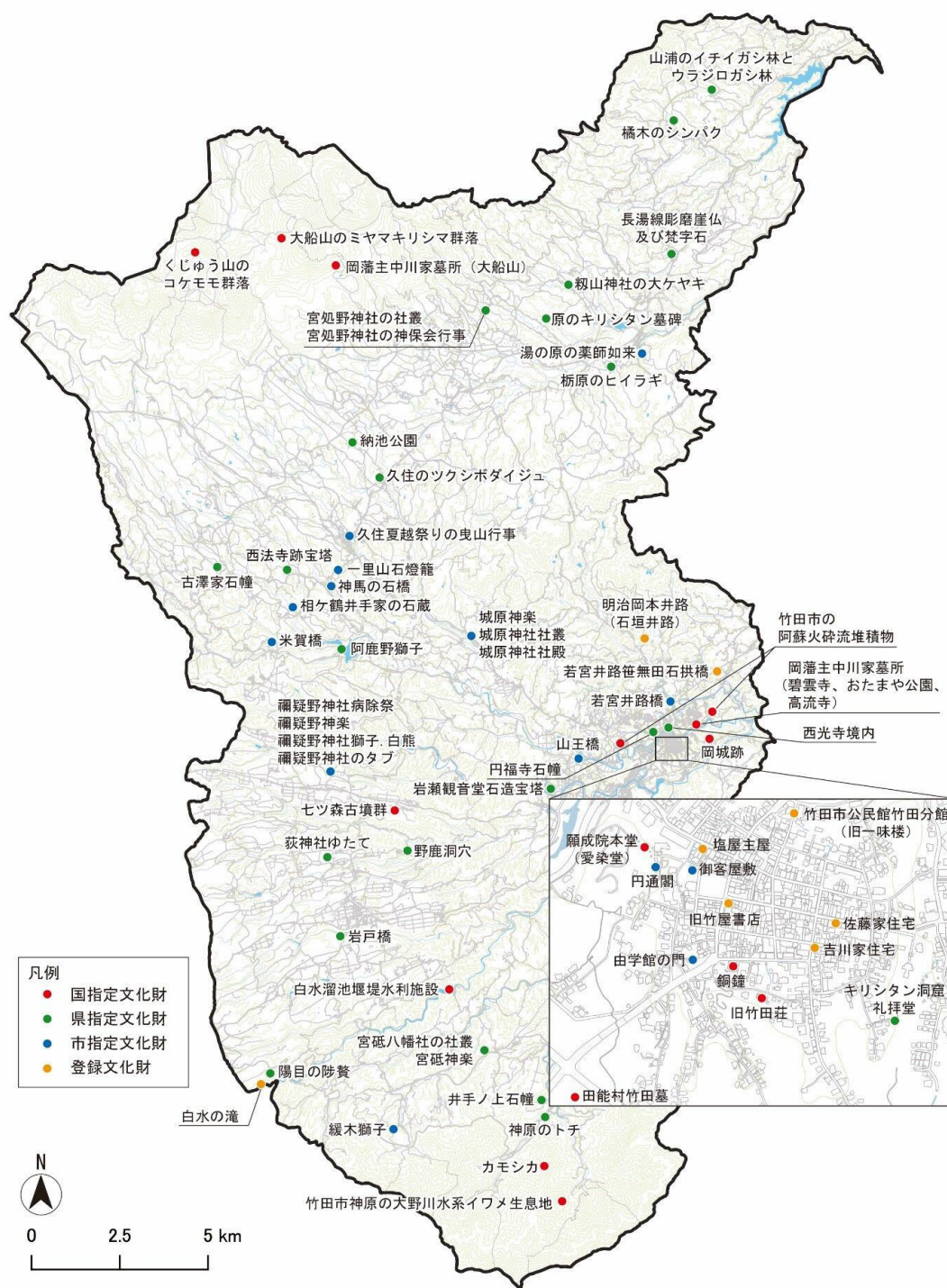
音無井路 12 号分水（円形分水）

〈都野神楽〉

県の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財である宮處野神社の神保会行事の構成要素となっている神楽である。明治初期に豊後大野市朝地町の深山神社大野郡岩戸神楽の指南役石川達により神楽を伝承され、「宮處野神社付属楽員」として発足した。



都野神楽



主要指定文化財分布図

（２）文化財の特性

市内の文化財の特性を把握するため、歴史的条件・地理的条件・文化的条件を基に、３つの区域を設定し特性を整理した。

①城下町に関わる特性

岡藩城下町は、江戸時代以降奥豊後における政治・経済・文化の中心地として栄えてきた。今もなお城下町建設当時の町割りのなかで住民が生活をし、国指定史跡旧竹田荘や重要文化財願成院本堂をはじめとする歴史的な建造物が数多く残されている。

城下町建設は中川秀成の入部後の文禄３年(1594)から着手された城築造と同時に着手された。中川秀成は大友氏の支族である志賀氏の居城であった岡城を居城に定め、近世的な城郭の築造を行った。入部から４年目の慶長元年(1598)には岡城築造は一応の完成を見る。城下町は岡城の西方約１kmの稲葉川南岸に開けた竹田村を城下町建設の地に選び、湿田を埋め、林や藪を切り開き、玉来や志賀氏時代に城下町であった挾田や十川から民家を移して町家の建設を行った。城下町構造は碁盤目状に区画された町割りの中央部に本町・上町・田町等の町家が配置され、町屋群を取り囲むように、武家屋敷（殿町・代官町・向町等）や寺院（寺町）を配する構造となっている。また、寛永７年(1630)に古町を町屋に組み込み現在に残る城下町の町割りが完成した。

城下町に見られる祭礼は、夏越祭・八朔祭・善神王様・恵比寿講・野狐祭等、江戸時代以降城下町内の町屋を中心に現在まで継続して行われている。祭礼の構造は、城下町の町割と密接な関係を持っており、西宮神社の本町組（本町）、神明社の古町組（古町）、岡神社の東部祭組合（上町・田町・新町・府内町）の３つの祭組合が各所属神社の祭礼を催し、各祭組合を構成する組（通り）ごとに恵比寿講が組織されている。また、城原八幡社の御下りである夏越祭は、各祭組合が交代で受元となり開催を行っている。（城下町の町割りと祭礼に見る特性）

また、竹田城下町は、江戸時代以降奥豊後における政治・経済・文化の中心地として栄えてきた。今もなお城下町建設当時の町割りで住民が生活をし、国指定の史跡旧竹田荘や重要文化財願成院本堂をはじめとする歴史的な建造物が数多く残されている。また、豊後南画の祖、田能村竹田・明治期の日本における代表的な作曲家瀧廉太郎・軍人廣瀬武夫・童謡作家佐藤義美などの偉人を数多く輩出する土壌を培い、今なお当時の面影のままの町並みから歴史と文化を感じることができる。市内では、これらの郷土の偉人を顕彰する活動が盛んに行われており、田能村竹田顕彰会・瀧廉太郎会・廣瀬武夫顕彰会・竹田よしみ会などが組織され、顕彰活動が行われている。（郷土の偉人の顕彰活動にみる特性）

②南部地域に関わる特性

竹田市の南部（祖峰地区・荻地区）は祖母山系から派生する急峻な地形により水田耕作には向かず、古くから畑作が主要な農業となっていたが、祖母山から湧き出す豊富な湧水を源とする大野川を利用し、近代以降、耕作地に農業用水を供給する水利施設が盛んに建設され、それらの灌漑施設は、農業関連の近代化遺産として現在でも利用されている。また、谷筋に展開する農村地帯では豊作を祈願する祭が各所で行われ、祭に奉納される神楽・獅子舞・白熊が数多く伝承されているなど、棚田や井路等の農村風景と豊作を祈願する民俗芸能を一体的に保存活用している。（農業近代化遺産に見る特性）

② 北部区域に関わる特性

竹田市の北部（久住地区・直入地区）はくじゅう連山の裾に広がる高原地帯である。久住高原は近代以降、畜産の放牧地・採草地として使用され、春には野焼きを行い高原の草地の維持を行っている。（高原景観の維持に見る特性）

この北部地域は、藩政時代に肥後領であった久住地域、「朽網（くたみ）」と呼ばれ中世期にこの地域の中心地として栄えた都野地域、近世以降に湯治場として開けた長湯地域があり、それぞれの地域の歴史的背景を由緒とする市街地環境を見ることができる。

久住地域は、豊後と肥後を結ぶ肥後街道、竹田と日田を結ぶ日田往還^{おうかん}が交差する交通の要衝であり久住は宿場町として栄え、また江戸時代を通じ肥後藩の代官所が置かれ、久住・小国（熊本県小国地域）地域支配の拠点となった。久住では8月に夏越祭が開催される。

都野地域は、大船山麓^{しちりだ}に広がる高原地帯で、古代から朽網郷の中心地として栄えた。江戸時代には七里田温泉に藩の御茶屋が建設され、3代藩主中川久清は大船山に登り軍事訓練を行い、その墓所も大船山の中腹に造られている。都野地区に鎮座する宮処野神社は景行天皇と嵯峨天皇を祀る神社で、秋には神保会（県指定無形民俗文化財）が行われる。

長湯地域は、古くから温泉地と知られており、『豊後国風土記』にも記されている。室町時代には朽網郷の領主である朽網氏の管理下に置かれていたことが文献に記されている。江戸時代になると岡藩により湯屋や御茶屋が建設され、長湯温泉は湯治場として整備され、岡藩歴代藩主や幕府からの巡見使も湯治に訪れている。長湯温泉（湯原温泉^{ゆのはら}）にある湯原薬師堂に温泉の守護神である薬師如来と地藏菩薩が安置されている。湯原薬師堂では温泉による諸病退散を祈願した温泉供養が行われる。（北部地域の祭に見る特性）